

# 日本健康科学学会学術大会開く

## 東京医科歯科大教授 若松秀俊・大会長が講演



若松大会長

大きく寄与する。と同時に、活の自己管理、リハビリテーション、看護支援に情報通信の新技术を」をテーマ

# 健康生活の維持・管理に

## 情報通信技術の積極的導入を

であった。今にあっては、練もなしに誰もが行える「遊び」と「遊び場」を提用する方法を提案した。さらに、今日の大きな課題である国民病と言われる糖尿病の予防や生活管理・看護に、またリハビリテーションにコンピュータによる遊興方法で、老人も子供も大人も活用する環境を保障する。また、その一つが大きな設備も多数の補助者も必要とせず、しかも何の訓練の呼び出しの自動化に用い

に講演を行った。1986年当時、誰も知らぬ間に老人が危険な場所に出してしまうことが特別養護老人ホームで介護者の心配事である。法の開拓は社会からの切実な要請でもあり、今回の大会ではその具体的方法も紹介された。その一つが大きな設備も多数の補助者も必要とせず、しかも何の訓練の呼び出しの自動化に用い

このほか、老人の健康に直結する「口腔ケア」について、一般市民だけでなく、医療に関わる専門家の間でも、普段からその意義や実践が十分認識されていない現状から、同学会では「お口の手入れが病気を予防」

また、「健口体操」の紹介は高齢者の口腔機能維持の重要性を訴えるものであり、衛生管理のみに注意が払われがちな口腔ケアに、石を投じたものとなった。この公開講座では、口腔ケアに対する認識が深まり、健康維持や疾患・障害の予防に貢献できることを確認できた。

日本健康科学学会第1回学術大会が1985年に開催されて以来、広く医療福祉従事者のみならず、数多くの分野から「健康の問題」に関心をもった国内外の学者等が熱い意見交換を行うほどに成長してきた。時の経過と共に、その関心内容も変わってきたが、なぜか「テクノロジー」を一つの重点項目として健康を語る場がほとんど設定されてこなかった。現実には、介護・保健・看護・リハビリテーション・救急などを通じて、人々の日常生活から医療まで広範囲にわたって支援することが、社会的要請となっている。これが人的資源の制約と連動する形

第23回大会で「健康を支える情報通信技術」をテーマに開催が実現することになった。情報通信技術の積極的な活用は、個人の生活向上と健康推進や周囲の人々との交流、在宅就労などの可能性を広げ、生きがいといった健康本来の目的の主旨に

今回、若松大会長が「生人とのつきあいはじまり